

組織目標評価報告書（令和 2 年度）

部局名： 埋蔵文化財調査研究センター

部局長名： 渡邊 和良

目 標		目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
①教育領域		教育領域の目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組
<p>【教育課程に関する具体的方策】</p> <ul style="list-style-type: none"> 博物館実習の授業の一部を分担し、構内遺跡の調査・研究成果を活かした授業を実施する。 出土遺物の整理業務にあたる非常勤職員と共に実習を行い、職場における環境を体験することで、実践型社会連携教育の拡充に寄与する。 <p>【教育方法に関する具体的方策】</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業に際しては、1班10名以下の少人数制を採り、自発的な思考や発言を促すことによって、内容に対する習熟度をあげる。学生全員が発表する時間を確保し、課題解決型教育に資する。 実習授業に際しては、SAあるいはTA1名以上を充てる。 <p>【学生支援に関する具体的方策】</p> <ul style="list-style-type: none"> ワークスタディを利用する学生を2名以上雇用し、本センターの職場環境を働く場として提供することで、社会性を育成するための教育支援と同時に経済的支援を行う。 	<p>目標に関連する 年度計画の番号</p> <p>2② 7③ 19②</p>	<p>【教育課程・方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> 博物館実習の授業は1日の授業となった。新型コロナウイルス感染症のため、8月に予定されていた実習形態の検討を余儀なくされたが、十分な感染症対策の元に対面方式の授業を問題無く実施できた。 全体的に、予定通りの目的を達することができた。 <p>【学生支援】</p> <ul style="list-style-type: none"> ワークスタディを利用する学生については、新型コロナウイルス感染症の影響で、応募の学生が得られない状況下において、1名の雇用ができた点は目標達成といえよう。
②研究領域		研究領域の目標の達成状況
<p>【目指すべき研究の方向性と水準に関する具体的方策】</p> <ul style="list-style-type: none"> 構内遺跡の研究を中心に、考古学・埋蔵文化財調査・研究に関して、国内外あるいは異分野の研究者との共同研究を3件以上実施し、国際水準の研究拠点としての活動をを目指す。 教員の個別研究を推進し、構内遺跡の研究成果とともにひろく外部に発信する論文および口頭発表を7件以上とする。 調査・研究に際して、3次元計測器やドローンを使用した新たな測量技術の活用を推進する。 	<p>目標に関連する 年度計画の番号</p> <p>27①</p>	<ul style="list-style-type: none"> 国内外あるいは異分野の研究者との共同研究は、12件を数える。目標の3件以上を大きく上回った。 論文・口頭発表数についても、27件を数え、目標の7件以上を大きく上回った。 あたらな測量技術の活用では、国内有数の規模を誇る造山古墳の航空レーザー測量に寄与した。 <p>以上のように、本領域では、目標を大きく上回る成果をあげることができた。</p>
③社会貢献(診療を含む)領域		社会貢献(診療を含む)領域の目標の達成状況
<p>【社会との連携や社会貢献および地域を指向した教育・研究に関する目標を達成するための措置】</p> <ul style="list-style-type: none"> 公開講座3回・展示会1回を開催し、構内遺跡の調査をはじめとする研究の成果を積極的に公開・発信し、大学から社会に向けて知の還元を図る。 岡山大学考古学研究室・倉敷考古館・倉敷市教育委員会との「産・官・学」連携により、倉敷考古館での特別展およびそれともなう講演会を実施する。 地域の埋蔵文化財に関する事案について指導的な助言を行い、地方公共団体等の埋蔵文化財行政に寄与する。指標は4件以上とする。 自治体などが開催する講座の講師要請に応じて、大学から地域社会への知の還元を図ることで、社会連携を促進する。指標は1件以上である。 構内遺跡の調査研究成果を活用して、地元の小・中学校の教育活動や本学周辺地域のまちづくり活動に協力し、地域の活力・魅力アップに貢献する。2件以上を指標とする。 	<p>目標に関連する 年度計画の番号</p> <p>47② 48①</p>	<p>本領域では、新型コロナウイルス感染症の影響が大きく、講演会や諸イベントの取りやめによって、目標値に届かない項目もあるが、新たにオンラインを利用するなどの工夫で成果を上げた。</p> <ul style="list-style-type: none"> 年度末に公開講座2回と展示会1回を開催した。公開講座は、感染対策を行うことで対面方式による開催を果たした。さらに、2回目ではZoomを利用したオンライン方式を新たに加えた。こうした取り組みは、今後の情報発信に向けての新たな可能性を探る手がかりとなった。 展示会は、通常の会場設営は避けて、オープンなパネル展示を採用することで開催にこぎ着けた。 自治体への寄与の件数は10件を超えて目標値4件を大きく上回った。 新型コロナウイルス禍において、倉敷考古館での特別展を「産官学」の連携によって実施できた点は大きな成果である。
④管理運営領域		管理運営領域の目標の達成状況
<p>【外部研究資金・寄付金その他自己収入の増加に関する目標を達成するための措置】</p> <ul style="list-style-type: none"> 科研費の申請100%以上、採択率50%以上を目指す。外部研究資金の獲得に資する。 公開講座の有料化を継続し、自己収入の増加に資する。参加者数は100名以上を目指す。 <p>【施設設備の整備・活用に関する目標を達成するための措置】</p> <ul style="list-style-type: none"> センター建物の老朽化に対して適切な修繕を行うことで、長期使用に備える。 <p>【安全管理に関する目標・法令遵守等を達成するための措置】</p> <ul style="list-style-type: none"> 安全衛生担当委員を中心に周知徹底を図る。 各種法令遵守を徹底するため、それぞれに担当者を決めて、毎月の会議で注意喚起を行う。 各種研修・講習に積極的に参加する。 <p>・非常勤職員の技術力・専門的知識の育成を図り、調査・研究体制を強化する。</p>	<p>目標に関連する 年度計画の番号</p> <p>87② 89① 91③ 92① 93②</p>	<p>【外部資金の獲得】</p> <ul style="list-style-type: none"> 科研費については、退職教員を除くと、継続を含めて申請率は100%を保っている。継続の案件が多いなかで、新規の獲得を1件加えることができた。以上の結果、教員の60%が科研代表の状態を維持しつつ、継続を含めて80%の獲得率となった。 目標に十分に達しており、それを上回る状態といえる。 <p>・公開講座の参加者数については、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、予定通りの開催ができなかったため、目標値には届かなかったが、それ以外の項目では、いずれも目標通りの成果を上げた。</p>
⑤センター・機構等業務		管理運営領域の目標の達成状況
<p>【施設設備の整備・活用等に関する目標を達成するための措置】</p> <ul style="list-style-type: none"> 発掘調査2件を実施し、本学の施設整備の推進に寄与する。 <p>【法令遵守への取り組み】</p> <ul style="list-style-type: none"> 構内遺跡に対して、建設工事に伴う発掘調査や立会調査を適切に実施する。調査にあたっては、その効率化と質の向上に努める。 発掘調査報告書作成のための整理作業を実施し、発掘調査報告書1冊を刊行する。 印刷部数の見直しを図り、50部以上の削減を目指す。 出土遺物・資料について適切な保管・管理を行う。 <p>【情報公開等や情報発信等の推進に関する目標を達成するための措置】</p> <ul style="list-style-type: none"> 『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2019』・『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報』64号・65号を刊行し、本センターの調査研究活動を積極的にかつわかりやすく社会に還元する。 ホームページの更新を積極的に実施し、情報発信に努める。 	<p>目標に関連する 年度計画の番号</p> <p>86① 85①</p>	<p>全ての目標を十分に達成した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 特に、印刷部数の見直しについては、発掘調査報告書で80部の削減を実施しただけでなく、紀要においても70部の削減を行い、目標値を大きく上回る成果をあげた。 報告書の作成においては、コロナ禍の影響で、予定していた分析データの一部が入手困難となり、原稿の欠落を余儀なくされた。その対策として、来年度の紀要に、研究報告としてレベルアップした内容を掲載することとし、研究成果の向上につなげることができた点はプラス材料と評価される。